

鮮緑の風 県大力

～学び続ける未来社会の基盤としての地域拠点大学への深化～

30年前、水田と里山風景が広がる窪木の里に岡山県立大学の学舎が建設された折り、その敷地下に遺された人々の営みが発掘調査で明らかにされました。縄文時代後期から近世の遺跡まで長期間にわたる営みの痕跡がありました。特に約2500年前の縄文時代晩期から弥生時代前期への転換期に、異文化の接触における新たな挑戦の場が生じ、ドングリ文化からイネ文化への転換が迅速に行われ、弥生時代の中心地となり、それが吉備の国への発展の礎になったと言われています。本学がそのような進取の気性に富む地域に設立されたことは、今後、新たな未来社会にて挑戦の場となりえるようで楽しみです。

そのような新天地に植物生態学で有名な宮脇昭先生のご指導の下、30年前に植栽された大学敷地との境界樹林は見事に成長し、現在、立派な里山樹叢を呈しています。一方、キャンパス内は関係教職員や地元の方々が心を込めて植栽された樹木が齢を重ね、しっかりと根圏が広がり、キャンパスに命を吹き込んでいます。その空間を吹き抜ける鮮やかな緑の風は知と感性と若さの象徴とされます。鮮緑の風を感じ、本学に関わった総ての人々により創り出された様々な県大力は、今、ここに静かに息づいています。素晴らしい地域資源です。

本学の源流は岡山栄養科学園、県立高等看護学校、県立保母養成所であり、それぞれ岡山県立短期大学に改組、統合されながら1993年の岡山県立大学の開学に繋がっています。本学にはユニークな3学部があり、保健福祉学部は人間の健康や福祉を、情報工学部は人間の知性や行動を、デザイン学部は人間の感性や感動を探求することにより、社会から期待される実学を学び、専門性を磨いて地域に貢献する人材を輩出してきました。卒業生や修了生が適材適所で活躍していることは、衆目の一致するところです。

さて、公立大学としての大きなミッションは社会貢献です。地域に根差した教育研究機関として、地域人材の育成、地域課題の解決、研究力の強化などが期待されています。

本学では大学間連携、高大連携、産学連携、地域連携を意識したプログラムを走らせています。深い専門性は各学部の主専攻で、豊かな人間力は副専攻「吉備の杜」で学ぶ教育システムを構築しました。文科省による「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(2015年度)」に続き、「大学による地方創生人材教育プログラム構築事業」として「吉備の杜」創造戦略プロジェクトが2020年度に採択されました。それを機に副専攻にて地域人材の育成ができる基盤を充実させました。

歴代学長

1代 1993(平成5)年度～小坂 淳夫

2代 1996(平成8)年度～高橋 克明

3代 2000(平成12)年度～本田 和男

4代 2004(平成16)年度～三宮 信夫

5代 2013(平成25)年度～辻 英明

6代 2019(令和元)年度～沖 陽子

本プログラムは地域と企業と大学の合体教育による異世代・異社会・多文化に対応した人材育成プロジェクトで、学部生から大学院生まで一貫して受講できます。特色は、PBL 演習で、企業や自治体等の課題解決に専門性も活かして取り組むこと、大学院では3研究科を横串にしたリベラルアーツ教育に注力して、幅広い人間力を持った地域創生人材を送り出すことです。「雑草型人材育成」と銘打っています。多種多様な環境圧をバネにして柔軟性と適応力に富んだ未来型思考と地域力を有する雑草型リーダーを育成しています。企業や地域の方からのご支援も厚く、社会人受講が増えて、リカレント教育が自然の流れで生まれています。

本年（2023年）は本学にとって開学30周年という節目の年です。今までの30年を振り返り、今後の30年を見据える年と考えます。今まで本学は、学部毎に教育研究を完結してきました。この多様性が求められる現代社会においては、「総花主義」「平均的主義」「自前主義」から脱却して、地域産業創生の駆動力となり、特定分野に強みをもつ大学になる必要があります。従って、これからの30年間は3学部、3研究科が共創の場を形成してイノベーションを生み、各学部・研究科が融合して、あらたな価値観を創出し、豊かな人材の養成により、学び続ける未来社会の基盤としての地域拠点大学への深化を目指す所存です。

アフターコロナとなり社会構造や経済社会、そして我々の生活スタイルも大きな変曲点を迎えています。爽やかで活力のある鮮緑の風と共に、今後、



第6代岡山県立大学学長

沖 陽子

Yoko Oki

地域や世界に開かれた大学への持続的な発展に努めて参ります。過去30年間で創り出された「県大力」は、この30周年を機に、斬新な地域の未来をしっかりと拓いていきますので、引き続きご支援をお願い申し上げます。本誌が皆様の岡山県立大学へのご理解とご支援にお役に立つことを祈念します。

2023年5月



開学30周年に寄せて

岡山県知事
伊原木 隆太

岡山県立大学は、1993年4月に「人間尊重と福祉の増進」を建学の理念として開学し、2007年4月には地方独立行政法人（公立大学法人）へ移行しました。

これまで、自主的、自律的な運営のもと、地域とともに発展する大学となるため、教育研究の質の向上や地域貢献の充実などに努めるとともに、業務運営の効率化や透明性の確保など継続的な見直しが行われてきました。

また、時代の要請や社会・経済情勢の変化を捉えながら、学科再編や全学的視点での組織改編などを実施し、特色や活力にあふれた、選ばれる大学づくりを進めてきています。

そして、保健福祉、情報工学、デザインの各分野において、学生の幅広い教養や高度な専門性、課題解決能力やコミュニケーション能力などの実践力を培うとともに、さまざまな主体との協働により、地域の発展に貢献できる有為な人材を多く輩出してきたところであります。

今後、人口減少や高齢化が急速に進む中、多様な課題に対して、地域全体で連携しながら対処していくことが求められます。こうした中、県立大学では、2020年度、文部科学省「大学による地方創生人材教育プログラム構築事業」に採択され、学部横断型の「吉備の杜」創造戦略プロジェクトがスタートしています。このプロジェクトは、地域のことを熟知し、地域の未来が展望でき、即戦力として活躍できる人材を産学官が協働して育成するもので、社会人のリカレント教育の推進にも寄与しているところであります。

こうした時宜を得た取り組みは、学長や教職員の皆様のたゆまぬご尽力の賜物であり、深く敬意を表する次第です。今後も、この30年間を礎として、その強みを生かしながら、地域に根ざした大学として活躍していただきたいと存じます。

県立大学は、県民の皆様をはじめ、県下の自治体や企業・団体など多くのご支援、ご協力をいただいております。県としましても、「第3次晴れの国おかやま生き生きプラン」において「教育県岡山の復活」を重点戦略に位置付けており、県立大学が地域に期待される拠点大学となるよう、引き続き、努力してまいります。

終わりに、将来にわたり魅力あふれる大学として益々発展するよう、また、卒業・修了された皆様の末長いご活躍を祈念いたしまして、発刊に寄せてのメッセージといたします。

開学30周年に寄せて



総社市長
片岡 聡一

少し前、東京の友達から「岡山県立大学って総社にあってすごいね」と言われた時、飛び跳ねるぐらい嬉しかった。

岡山県立大学の歴史と総社市の歴史は共にある。たまたま30年間重なり合っただけかもしれないが、我々総社市はそれ以上に県大に愛を感じている。

もし県大がない総社市を想像してみた時、一体どんな気持ちになる？

今ではもはや想像すらできなくなっている。それぐらい両の手で手を繋ぎ、お互いがカウンターパートとして揺るぎなく共に歩んでいるからだ。

振り返れば包括協定を結んだ直後、我々総社市は貴学からアイデア作品をいただくばかりの関係だった。総社市のポスター・観光案内板のデザイン。今から思うと恥ずかしいくらいだ。総社市のイメージキャラクター「チュッピー」でさえ、貴学の学生さんに作っていただいたデザインなのだ。

そこから脱却した方がいいよねと、当時の三宮学長と私が話をし、じゃあお互いの手の内を明かして総社市の政策全てと貴学のトライ全てを理解した上で、共に作っていきましょうという間柄に即座に変えていった。

その結果、セカンドステージとしてインターンシップ制度をスタートさせた。お互いの懐に飛び込み、お互いが理解して共に働いていく市役所現場がすぐさま出来上がった。

これまで273人の県大生を迎え入れ、28人が実際に総社市職員になって働いている。総社市でインターンシップを経験し、市役所で働くという仕組みを、いったい全国どこの大学が持っているのか。

そして我々はそのステージからさらに脱却し、本当にお互いの成長を思い、実際にお互いの利益を通り越して、他者を幸せにしていく間柄になるということを誓い合った。

貴学が提唱したCOC+で他市との連携も始まったが、我々はそれを喜んで受け入れる。そして災害の時には、県大をベースキャンプとして市外の避難者を迎え入れていく。お互いの能力や情熱が、我々以外の人々に幸せをもたらしていく関係構築に成功したのだ。

思えば長い道のりだったかもしれないけれども、私は貴学に対して様々な提言を繰り返し、今日よりも明日、明日よりも明後日、来年よりも再来年と、より良い関係が構築できるようにかなり厳しいことも言い続けてきた。同時に歴代の学長を始め多くのスタッフの方から総社市に対する提言を我々の何倍もお返しいただいたと思っている。

手厳しいご意見などもいっぱいあったけれども、それを甘んじて受け入れお互いが成長し合えた。

この両者の関係は30年に留まらないことを確信している。

本当におめでとうございます。

開学30周年を祝して

岡山県立大学後援会前会長

河田 頼治



後援会を代表いたしまして、お祝いのお言葉を述べさせていただきます。岡山県立大学開学30周年、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。環境の整った広々としたキャンパスで学生たちが、生き活きと充実した教育を受けることができ、将来必要となる専門知識を享受できることに大学関係者皆様に深く感謝いたします。岡山県立大学は、77年前に開園した岡山栄養科学園から始まり、ここ総社市に新たな大学として開学し、公立大学法人化を経て30年の月日が経ちました。昨今の厳しい時代の中、今まさに大きく飛躍する時を迎えていると感じております。

当後援会は、大学の事業を援助し、教育及び研究の振興に資するとともに、学生の福利厚生増進に努め、大学の円満なる発展と会員相互の連絡・親睦を図ることを目的とし、1993年4月に開学と共に発足いたしました。後援会が行う事業は、大学と連携し学生のための福利厚生増進や、大学の教育設備の整備充実を援助することなどを主体としております。

さて、開学20周年から30周年に至るこの10年間を振り返ると、2018年7月には総社市をはじめとして岡山県内に大きな被害が発生した豪雨災害により、学生、大学教職員、地域の方々にも大きな影響が出ました。その翌年には平成から令和に元号改正が行われ、2020年当初から新型コロナウイルス感染拡大により、対面授業が出来ずオンライン授業が主流となりました。学生は大学に通うことが出来ず、友人とのコミュニケーションも取れない中、後援会では大学事務局と連携し、学生のために支援事業を実施してまいりました。また、ここ数年のコロナ禍により、保護者の皆様におかれましては、入学式、卒業式にご参加できず後援会総会も中止になるなど保護者と大学との交流にも大きな障害をきたしました。

今後も後援会は、先が見通せない時代の中にあっても、学生を支援することに主軸を置いた事業を大学教職員と共に行っていきたいと考えております。後援会会員の皆様には引き続き当会活動へのご理解、ご協力のほど宜しくお願いいたします。

30周年記念事業の一環として学生食堂のリニューアルが行われますが、学生、大学教職員だけではなく、地域の方々も利用しやすい開かれた場所となることに後援会としても大いに期待しております。開学30周年のスローガンである「鮮緑の風、県大力」のもと、学生、教職員、同窓会、後援会、地域が綿密に連携し、今後も力強く躍進する大学となることを祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。

岡山県立大学開学30周年に寄せて



岡山県立大学同窓会会長 平野 悦子

岡山県立大学開学30周年おめでとうございます。

我が同窓会は、1953年に岡山栄養科学園同窓会として会員175人で発足。1961年に履修科目の拡大充実が図られ、本大学の前身である岡山県立短期大学が設立されたのと同時に岡山県立短期大学同窓会と改称。1993年に本大学が開学した後、学部ごとに発足していた同窓会が統合し、2002年に岡山県立大学同窓会として活動が始まり、2011年に岡山県公衆衛生看護学校同窓会が加入し、現在の体制となりました。現在の会員数23,175人（2022.6.22現在）その半数以上を大学卒業生が占めるようになりました。同窓会を引っ張ってくれているメンバーも大学の卒業生が主となっています。

70年の歴史の上にこの30年があり、大学の建学理念である「人間尊重と福祉の増進」は、前身から引き継がれてきた思いが脈々と繋がっていると感じます。またその理念に基づく活動は、大学内にとどまらず、企業、自治体、地域との協働事業を起し、地域の活性化にまで視野を広げた事業展開が行われています。さらに2020年から世界的に猛威を振るってきた新型コロナウイルス感染症の蔓延は、大学の運営、学生生活に大きな影響を及ぼす事態となりましたが、オンライン教育等コロナ禍でも人とのつながりを絶やさない工夫がなされてきました。コロナを踏台に、岡山県立大学ならではの力が発揮されることを期待しています。

理念を守り、さらなる発展を目指し、非常事態への対応にも尽力し、30周年を迎えることができたのも諸先生方、職員の皆様、学生の皆様、大学関係者、さらには地域の皆様方のおかげと感謝と敬意を表します。

本大学が、開学して30年が経つということは、生まれたばかりの子が、30歳になる年。孔子の言葉「^{さんじゅうじりつ}三十而立」30歳にして立つと読み下し、その意味は、学識や道徳観も確立して、世に立つ自信も得る年齢であるとありました。今大学もこの時にあり、今後さらに自信を持って、大学内にとどまらず地域の未来にまで関わる大学に発展することを期待しています。

大学の構内は、冬でも緑が目につきます。照葉樹（冬でも落葉しない広葉樹）が多く、学舎を囲うように照葉樹林が広がっています。照葉樹林は、火事や自然災害に強く、昔から社寺周囲に広がる“鎮守の森”を作っているそうです。これは、亡宮脇昭氏（岡山県高梁市成羽町出身の生態学者）の設計とのこと。第1期の学生や教職員をはじめ地域の方々により植樹された木々が今では、しっかり根付き、見事な鎮守の森を形成しています。私はこの緑いっぱいの大学が大好きです。

鎮守の森に守られた大学が、これからも大きく発展し、40周年、50周年と迎えていくことを楽しみに、同窓会もできる支援をしていきたいと強く思っています。